

主催●文化財保存修復学会／東京国立博物館

後援●文化庁／台東区／日本文化財科学会／日本博物館協会／全日本博物館学会／
読売新聞社／NPO法人文化財保存支援機構

平成19年10月28日(日)

会場●東京国立博物館・平成館大講堂
(東京都台東区上野公園13-9)

文化財の保存と修復Ⅱ

博物館の役割と未来

開催趣旨

人類共通の遺産である文化財を保護し後世に伝えていくことは我々の責務です。実際に文化財を保護していく上で最も重要なことは、広く社会の理解と協力です。このことは各人が各地域において、文化財に接し、その保存、維持のために何らかの行動を起こすことによって具体的に実現化します。

多くの人々が文化財に接する最も身近な場所は博物館です。日本国民で博物館を訪れたことのない人はほとんどいないでしょう。学校教育の中でも博物館見学が多く実施されています。博物館ではきわめて貴重な国指定文化財から、地域を特色づける各種資料まで、多種多様な文化財が保存収蔵、展示公開されており、調査研究と修復処置が行われています。

文化財の保護と活用のためのこれら博物館の活動についてわかりやすく説明し、多くの人々、特に次代を担う若い人たちに理解してもらい、もって、広く社会の文化財の保護に対する意識を高めることが本シンポジウムの趣旨です。また、熱意ある青少年に対しては、文化財関係分野を目指す良いきっかけともなるでしょう。

総合司会 ●東京国立博物館 井上 洋一

10:00～10:05	開会挨拶	文化財保存修復学会会長・実行委員長／九州国立博物館	三輪 嘉六
セッションⅠ 基調講演 ●座長 奈良文化財研究所 村上 隆			
10:05～10:40	プロパティからヘリテージへ	ユネスコを中心とした文化財保護の世界の動向	東京国立博物館 佐藤 禎一
10:40～11:15	博物館の新たなイメージ		九州国立博物館 三輪 嘉六
セッションⅡ マネージメント ●座長 東京文化財研究所 石崎 武志			
11:20～11:45	博物館環境のマネージメント		東京国立博物館 神庭 信幸
11:45～12:10	修理所の使命		京都国立博物館 森田 稔
12:10～12:35	保存担当学芸員が担う役割		東京文化財研究所 三浦 定俊
12:35～14:00	昼食休憩		
セッションⅢ 新しい挑戦 ●座長 東北芸術工科大学 松田 泰典			
14:00～14:25	保存修復へのアクセス		東京国立博物館 土屋 裕子
14:25～14:50	生物被害を未然に防ぐ		国立民族学博物館 日高 真吾
14:50～15:15	県立博物館での挑戦		東北歴史博物館 及川 規
15:15～15:30	休憩		
セッションⅣ パネルディスカッション ●座長 国士舘大学 西浦 忠輝			
15:30～17:00	博物館の役割と今後の展望		
	パネリスト	三輪 嘉六／神庭 信幸／森田 稔／三浦 定俊／ 土屋 裕子／日高 真吾／及川 規	
17:00～17:10	総括と閉会挨拶	文化財保存修復学会会長・実行委員長／九州国立博物館	三輪 嘉六

プロパティからヘリテージへ ユネスコを中心とした文化財保護の世界の動向

東京国立博物館 佐藤 禎一



1. ユネスコをめぐる文化政策の流れ

- (1) 文化的同一性尊重期
- (2) 文化の開発援助重視期
- (3) マイノリティーの文化擁護期
- (4) 文化の多様性確保期

2. プロパティからヘリテージへ

- (1) 世界遺産条約以前
- (2) 世界遺産条約 (1972年)
 - * 暫定リスト、世界遺産リスト、危機リスト、提案数のシーリング
 - * 顕著な普遍的価値 (Outstanding Universal Value)
 - * 真正性 (Authenticity)、完全性 (Integrity)
 - * 補助団体 (ICOMOS、IUCN、ICCROM)
- (3) 水中遺産条約 (2001年)

(4) 無形遺産条約 (2003年)

- * 代表リスト、世界リスト、危機リスト、シーリングなし
- * OUVの要件なし
- * 補助団体の未確定

3. 文化多様性条約

- (1) 条約の背景
- (2) 条約の仕組み
- (3) 条約の問題点

4. その他

- (1) 残された遺産一言語
- (2) 第二次世界大戦中に持ち去られた文化財に関する原則宣言案

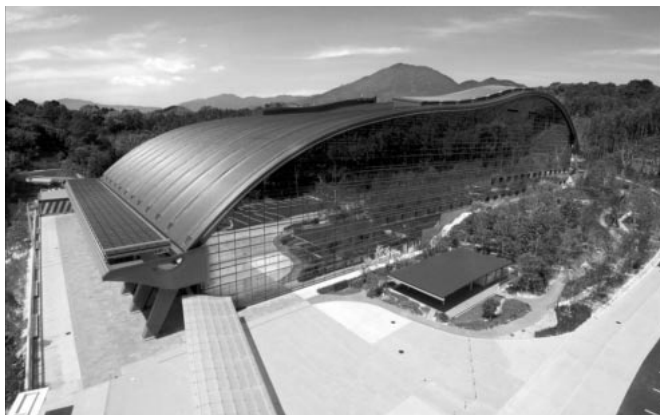
博物館の新たなイメージ

九州国立博物館 三輪 嘉六



博物館が文化財の保存と修理にどのように関わっていくか、とした問題についてこれまで博物館が議論の対象となることは少なかった。それはどちらかといえば博物館は、文化財の公開・活用（展示・陳列）の場とした側面が強調されてきたことによる。

しかし、これからの博物館は、市民社会と共生しながら活きている博物館活動を実践していく多様なあり方が求められているわけで、文化財の保存問題も博物館活動の一つとして大きな視線を注いでいく必要がある。特に、文化財を積極的に活用していくことは博物館として不可欠な取組みであるが、当然のこと、その一方では文化財保存上の大きなリスクを伴うことにもなる。この負の部分为解决してゆくことこそ博物館の新しい取組みに通じる課題である。つまり、博物館の体制づくりに保存科学の組織を導入することによって、博物館での文化財の保存や修理への対応が可能となってくる。



平成17年10月に九州・太宰府の地に開館した九州国立博物館はそうしたことのいくつかを試み、博物館科学部門を組織した。それによって、博物館の危機管理、修理機能、文化財の保存環境の確立等を図りながら、「文化財にとって」も「見る人にとって」も安心・安全な博物館づくりにむけて挑んでいる。その様相を紹介しながら、これからの博物館の新しいあり方を提示したい。

博物館環境のマネジメント

東京国立博物館 神庭 信幸



文化財の保護を考えると、収蔵庫や展示場での環境保全、文化財の材質や状態の診断、文化財の状態に対応した修理など、まず保存修復に関する取組みの方をより強く意識することが多い。一方、文化財とは公開されることによって、初めてその存在と価値が広く社会に認知されるものであり、それによって保存修復についての意識が生まれ、広がり、深まっていくものであると考える。故に文化財を公開するときには、対象となる文化財が保有する歴史的価値、美術的価値が損なわれたり、誤解を受けたりすることがないように、それらの価値が鑑賞者に最大限に適切な姿で受け止められるような環境や文化財の状態を整える必要がある。このように文化財保護の意味の中には、保存と公開が強く意識されているのであり、保存することと公開することは文化財を後世に伝えていくために必要な両輪である。

博物館では文化財の保存と公開の立場に立った活動を基本原理とし、そのために初期段階における保存処置の効果的な実施、必要に応じた保存修復処置の確実な保証という原則を踏まえた取組みの必要がある。こうした取組みを今東京国立博物館では臨床保存学と呼んでいる。それは全体を見通した保存を意味し、包括的保存あるいはプライマリ・ケアとも呼ぶ。プライマリ・ケアの中には、予防保存と修理保存が含まれる。一般に修理技術者は修理処置に重点を置いて活動を行うが、臨床保存学では修理も含みつつ、文化財の予防に重点を置いた実践に取り組むことが必要となる。

環境保全計画は予防保存の具体的な方法論である。環境保全計画が目指すものは、作品に残されたオリジナルの保全が目標である。オリジナルを守るために、作品に影響を及ぼす環境因子の一つ一つに対して、リスクの確認、リスクの測定・評価、リスク処理方法の選択、リスク処理方法の実施、リスクマネジメントなどの手順を休むことなく繰り返していくことが必要となる。



臨床保存 対症修理 Remedial Treatment

修理所の使命

京都国立博物館 森田 稔



わが国の文化財の多くは、紙・絹・木といった脆弱な材質で構成されている。にもかかわらず多くの文化財が伝来してきた理由は、日本人の美意識に基づく選別と、それを支えた修理である。定期的に本格修理を行うことにより劣化の進行を最小限に止めてきた。

絵画、書跡・典籍、古文書などの修理は装潢と呼ばれ、奈良時代の養老令の官撰注釈書である『令義解』には、「装潢手(師)」という職業の存在が知られる。木造彫刻は、仏師たちが新たな仏像を製作する一方、修理も行ってきた。このようにわが国においては民間に文化財修理を担う修理技術者組織が根付き、連綿と継承されてきた。

明治時代になると神仏分離令以降、廃仏毀釈の嵐が吹き荒れ、寺院のみならず文化財も危機的状況に陥る。それを危惧した明治政府は、明治30年に本格的な文化財保護を目指す『古社寺保存法』を制定するとともに、京都・奈良に帝国博物館を設置する。両館では設置当初から受託文化財の修理を博物館の経費で行うことを盛り込むなど、文化財保護の最前線として位置づけた。

修理は原則として博物館構内で、民間の修理工房が行うこととなり、現在の両館の文化財保存修理所に受け継がれている。博物館側では保存修理指導室を中心に、美術史を専門とする研究員が美術的価値や技法を中心に随時指導・助言を行い、修理技術の維持・向上の一助となっている。また一昨年開館した九州国立博物館では館の研究組織の一つに博物館科学課を設置して保存修復施設を管理するとともに、文化財の美術的価値は技法のみならず、分析や修理についても博物館の研究員と修理技術者が一体となって取り組む、新たな試みを始めている。

このように博物館における修理所は展示・公開のためだけではなく、伝統的修理技術の維持・向上を目指すとともに、修理技術者の育成にも大きく関わっている。

保存担当学芸員が担う役割

東京文化財研究所 三浦 定俊

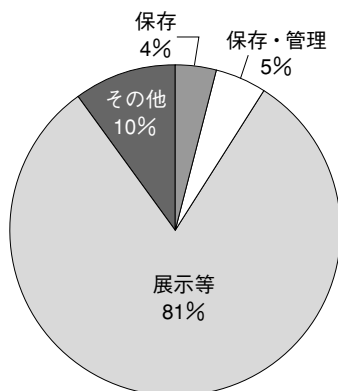


博物館法第二条に述べられているように、博物館は資料を収集、保管、展示、調査研究する機関であるが、保存を専門とする学芸員が配置されている館は、国立や都道府県立の一部に過ぎず、その人数は学芸員全体の数に比べればきわめて少ない。反面、保存を担当する学芸員をおいている館は全国に少なくない。その現状を見ると、「保存担当学芸員」は「保存専門学芸員」とは異なるものと考えられる。

保存が展示や調査研究と並んで、博物館学芸員の重要な業務として認識されるようになったのは、個別の博物館の状況は別に

しても全国的に見れば、重要文化財を借用して展示する際に、文化庁が各施設の展示環境に関して東京文化財研究所の協力を得ながら、指導・助言を始めるようになった1980年代頃からである。当時は新しい博物館・美術館・資料館があいついで各地に建設され始めた時期でもあり、建設についてデザインだけでなく資料保存の観点も建物の設計・施工に反映させることが急務とされていた。また建設時だけでなく開館後に資料を守っていくためにも、学芸員が保存に関する知識を習得していることが欠かせないが、そのための場として東京文化財研究所では、1984年から保存担当学芸員を対象とする研修を始めた。修了生は今年度で537名になったが、研修の内容も時代と共に研修生からの意見を参考にして変わり、現在では2004年末での臭化メチル全廃を受けて、IPM（総合的有害生物管理）など保存環境に関するものになっている。

東文研の保存担当学芸員研修受講者の館における主な業務
約8割が展示等の業務に関わっている



ここでは近年11年間の研修生325名からのアンケートをもとに、全国の博物館・美術館などで保存担当として働く学芸員が、実際にどのような仕事をしているのか、保存について何をを知りたいと思っているのか等を解析した結果をもとに、「保存専門学芸員」ではない「保存担当学芸員」の役割とは何であるかを考えていきたい。

保存修復へのアクセス

東京国立博物館 土屋 裕子



「コレクションと史跡への物理的・知的なアクセスを促すことは、世界中の文化機関にとって第一の目標である。」これは『保存とアクセス (Conservation and Access)』というテーマのもと、2008年ロンドンで開催される22回目のIIC国際会議説明の冒頭です。これを文化財保存の世界共通のテーマとしてとらえ、「アクセス」をキーワードにしながら、現在東京国立博物館で行っている保存の実践、特に保存修理についてご紹介いたします。

博物館・美術館などの機関は鑑賞、研究、保存など文化財に関する活動を行うひとの文化財への物理的・知的「アクセス」ゾーンであるといえましょう。この「アクセス」ゾーンでは、さまざまな分野、考え方の異なるひとが密接に関係しています。保存に携わるひとは「アクセス」ゾーン内またはそこへ移動させる文化財の安全確保、ひとの文化財への「アクセス」を安全に促すために、コミュニケーションを絶やさず、時にはバイパスを作り、ダメージを回避しながら文化財とそれに関するひととの架け橋となることを目標としています。当館ではPreventive Conservationを大前提とし、文化財を取り巻く環境を整えたうえで、不必要な負担は極力避け、必要最低限の処置で安全を確保する修理保存の実践に力を注いでいます。修理は一般的に予防保存 (Preventive Conservation) に含まれない活動としてとらえられていますが、文化財への「アクセス」時に想定されるあらゆる危険性を回避するという予防の意味合いの濃い修理保存処置を、当館では予防保存を支える活動として位置づけております。また、こうした取り組み全体を臨床保存と呼んでいます。臨床保存という活動自体への「アクセス」として、活動紹介の常設展示、現場へのツアー、修理作品展示、インターンの受け入れ、修理報告書による修理保存の公開なども積極的に行い、文化財への架け橋としての臨床保存に皆様の関心をお寄せいただけるような取り組みに挑戦しております。



東京国立博物館蔵「御本丸城園中菊之茶屋」(P-2456)
展示に先立ち糊離れや折れなどに対症修理を施す

生物被害を未然に防ぐ

国立民族学博物館 日高 真吾



さまざまな資料が収蔵される博物館の中でも、特に民族(俗)博物館は生物の被害が発生しやすい博物館といえる。これは、民族(俗)博物館で収蔵している資料の材質が木製品を中心に、テキスタイルや皮革、毛皮など生物被害の発生しやすい材質で構成されるものが多いという事情に関連する。

生物被害が一度発生した場合、資料に与える損傷や汚損等のダメージは大きく、且つ、生物被害の発生した資料の修復には多くの予算を投じる必要が生じる。また、その発見が遅れた場合、被害範囲は想像できないくらい広範囲におよぶことも少なくない。そこで博物館では、日常的に生物被害の発生を未然に防ぐための活動、もしくは、仮に生物被害が発生した場合でも、早期に発見し、迅速に対応するシステムが求められるのである。

国立民族学博物館では、生物被害対策として文化資源研究センターが設置された2004年度を契機に、これまで以上にその予防対策と早期発見のためのシステム作り、館内職員で対応できる対処方法の導入を積極的に実践している。まず、生物被害の予防対策としては、収蔵庫内の空調管理、新着資料や貸し出し資料への殺虫処理対策を実施している。また、生物被害の早期発見については、展示等での資料活用前後の資料点検、毎朝の展示資料点検を行っている。なお、生物被害の対処法についてはエタノールを利用した殺菌処理や二酸化炭素処理を館内職員で実施できるよう、マニュアル化を実現した。

これらの生物被害対策は、作業者に作業目的を明確に伝え、その活動を継続できる環境を整えることで効果を発揮する。博物館における生物被害対策とは、博物館の継続力が試される活動でもあるのだ。

県立博物館での挑戦

東北歴史博物館 及川 規



東北歴史博物館（宮城県多賀城市）は、後期旧石器から昭和40年代までの、宮城をはじめとする東北地方全体の歴史・文化を対象にした、宮城県立の人文系博物館である。敷地面積77,000 m²、延床面積15,500 m²、展示室6室、収蔵庫7室を持つ。前身の東北歴史資料館を継承発展させ、平成11年に新規オープンした。



東北歴史博物館（宮城県多賀城市）

昨今、地方の博物館や美術館を取り巻く状況は非常に厳しいものがあり、その中で、少しでも活動の質を高めるためにはどうするか大きな「挑戦」課題である。

博物館にとって資料の安全な保管は重要な責務の一つである。そのため当館でも、出土遺物の保存処理や館蔵資料の保存環境の調査・管理など様々な取り組みを行っている。

その一つに「収蔵庫に多用される木材の揮発成分とその文化財材質への影響」に関する一連の調査がある。これは、ベイスギなどを対象に、木材自体が放散する揮発成分に着目し、その影響や変質原因物質（変質因子）、対応策等について検討しているもので、現在も継続中のテーマである。

これまでに、木材揮発成分が文化財材質に与える影響は樹種により大きく異なり、またその変質因子は、樹種によっては、従来着目されていた酢酸やギ酸以外の物質であるなど、新しい知見がいくつか得られ、いろいろな場面で情報発信させていただくことができた。それが可能になったのは、様々な組織（産官学）の全面的な協力があったからこそである。当館単独では、何一つ明らかにできなかったと思う。連携やネットワークということの重要性を痛感しているところである。

このことは、博物館の運営全般における様々な課題・問題点の打開の面でも活用できるかもしれない。有機的かつ高度な連携体制構築の検討は挑戦に値する課題の一つと考える。

6



佐藤 禎一（さとう ていいち）

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館館長

1964年京都大学法学部卒業。文部省入省、文化庁次長、学術国際局長、官房長、事務次官、日本学術振興会理事長、ユネスコ日本政府代表部特命全権大使を経て、2007年より現職。政策研究大学院大学理事、OECD教育研究革新委員会理事、ユネスコ・教育計画国際研究所理事。

02年フランス共和国国家功労勲章オフィシエ受章。

三輪 嘉六（みわ かるく）

独立行政法人国立文化財機構九州国立博物館館長／文化財保存修復学会会長

日本大学史学科卒業。奈良国立文化財研究所研究員、文化庁主任文化財調査官、東京国立文化財研究所修復技術部長、文化庁美術工芸課長、同庁文化財鑑査官、日本大学教授を経て、1998年より九州国立博物館設立準備室室長、2005年より現職。文化審議会文化財分科会専門委員、独立行政法人評価委員会委員（文化分科会）をはじめ、各地で文化財の保存・活用についての各種委員。99年から文化財保存修復学会会長に就任。

専門は考古学、博物館学、文化財学。

著書に『日本馬具大観Ⅰ～Ⅳ巻』（編著、吉川弘文館）、「家形はにわ」（『日本の美術』至文堂）、「美術工芸品をまもる修理と保存科学」（『文化財を巡る科学の眼5』国土社）、「Horses in Ancient Times」（『Horses and Humanity in Japan』The Japan Association for International Horse Racing）、「文化遺産危機管理的基本課題」（『1999台湾集々大地震—古蹟文物震災修復技術諮詢服務報告書—』台湾国立文化資産保存研究中心）など多数。

神庭 信幸（かんばん のぶゆき）

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館文化財部保存修復課長

1977年東京都立大学理学部物理学卒業、79年東京藝術大学美術研究科大学院修士課程保存科学専攻修了、97年博士（美術）。92年国立歴史民俗博物館情報資料研究部助教授、98年東京国立博物館学芸部保存修復管理官を経て、2001年より現職。文化財保存修復学会運営委員。

専門は文化財の保存科学、特に予防保存と修理保存、伝統と科学の融合的かつ実践的な保存手法として博物館における臨床保存学の確立に取り組んでいる。

主な論文に『文化財の輸送、展示、収蔵のための小空間における湿度・水分の変化に関する保存科学的研究』（学位論文、1997）、「東京国立博物館における環境保全計画—所蔵文化財の恒久的保存のために—」（MUSEUM 第594号、2005）、Analytical study of paintings by X-ray radiography and spectroscopy, 'X-rays for Archaeology', Ed. M. Uda, G. Demortier, I. Naka, Springer, Netherlands (2005)

森田 稔（もりた みのる）

独立行政法人国立文化財機構京都国立博物館学芸課長

1978年広島大学文学部史学科考古学専攻卒業、80年名古屋大学大学院文学研究科考古学専門博士課程（前期）修了。神戸市教育委員会文化財課学芸員、神戸市立博物館学芸員、文化庁文化財部美術学芸課主任文化財調査官・文化財管理指導官を経て、2004年から現職。専門は考古学、特に窯業史、金工史。文化財学。

著書に『考古資料集成 第6巻 弥生・古墳時代 青銅・ガラス製品』（共編著、小学館、2003）、「縄文・弥生・古墳」（『アジア陶芸史』、昭和堂、2001）、「つたえる—災害を越えて—阪神・淡路大震災と文

化財一」(『よみがえる文化財 芸術と科学の接点』、文化財保存修復学会編、クバプロ、1995)がある。

三浦 定俊 (みうら さだとし)

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所副所長

1971年東京大学工学部卒業、73年東京芸術大学大学院修了(保存科学専攻)。73年東京国立文化財研究所保存科学部研究員、保存科学部長、協力調整官、企画情報部長を経て、2007年より現職。東京芸術大学大学院美術研究科(文化財保存学専攻)教授(連携)。国際保存学会日本支部(IIC-Japan)副会長、文化財保存修復学会諮問委員等。

専門は保存科学(物理計測)。

主な著書に『文化財保存環境学』(共著、朝倉書店、2004)、『文化財科学の事典』(編著、朝倉書店、2003)、『古美術を科学する』(廣済堂出版、2001)、『文化財探査の手法とその実際』(共著、真陽社、117-132、1999)、『美術を科学する』(共著、日本の美術400号、74-79、至文堂、1999)、『回顧・金堂罹災』(共著、法隆寺、1998)、『平等院大観』(共著、第3巻「絵画」、岩波書店、1992)、『光学的方法による古美術品の研究』(増補版共著、吉川弘文館、1955、増補版1984)

土屋 裕子 (つちや ゆうこ)

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館文化財部保存修復課保存修復室主任研究員

1988年多摩美術大学美術学部絵画科(油画)卒業、94年東京芸術大学大学院美術研究科芸術学保存修復技術(油画)在学中にスペイン給費留学生としてスペイン国立マドリード・コンプルテンセ大学美術学部博士課程(絵画・絵画修復)編入、96年単位取得、以来在籍中。97年東京芸術大学に学修士修了後、文化庁芸術家在外研修員としてスペイン国立文化財保存修復研究所(IPHE)にて約2年間の研修を経て、99年より現職。

専門は文化財保存学、特に油彩画の修理保存。現在は、収蔵品の修理保存全般に関わりながら、博物館資料の歴史性に注目、その中における日本近代洋画の足跡に興味をもつ。

論文に「博物館草創期の高橋由——浅草文庫伝来品とウィーン万国博覧会関連品——」(『MUSEUM』595号、2005)、「国沢新九郎筆『ランプと洋書』について」(『MUSEUM』599号、2005)、「東京国立博物館所蔵 ポール・ルヌアール筆素描と版画—描画材料・技法および保存修理—」(『MUSEUM』604号、2006)などがある。

日高 真吾 (ひだか しんご)

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立民族学博物館文化資源研究センター助教

1993年東海大学文学部史学科日本史学専攻卒業。2006年博士(文学)取得。財団法人元興寺文化財研究所研究員を経て、02年より国立民族学博物館に所属。

専門は保存修復。特に民族資料。現在は、博物館の危機管理や被災文化財の保存修復方法の開発に興味をもつ。

著書に『女乗物—その発生敬意と裝飾性—』(東海大学出版会、2008年2月出版予定)、主な論文に「Material Research of Onna-norimono by using a Portable XRF」(“Non-destructive Examination of Cultural Objects-Recent Advances in X-ray Analysis”, Tokyo National Research Institute for Cultural Properties 2006)、「漆と工芸品」(『季刊民族学』112号、財団法人千里文化財団、2005)、「女乗物に用いられる蒔絵技法と漆塗の観察」(『文化財保存修復学会第48号』、文化財保存修復学会、2004)がある。

及川 規 (おいかわ ただし)

東北歴史博物館学芸部主任研究員

1981年山形大学大学院工学研究科応用化学専攻修了、85年東北大学大学院理学研究科化学第二専攻博士後期課程中退、2005年東京大学にて博士号(農学)取得。宮城県高等学校教諭、マレーシア工科大学講師(文部省派遣)、東北歴史資料館技術主査、東北歴史博物館学芸部研究員、同副主任研究員を経て、06年より現職。

専門は、文化財保存科学、特に環境科学。現在は、文化財保存における木材揮発成分の作用全般に興味をもつ。

主な論文に「木質系内装材を用いた博物館収蔵庫の空気環境と木材揮発成分が文化財材質に与える影響」(木材工業61、345-349、2006)、“Volatile organic compounds from wood and their influences on museum artifact materials. II. Inference of causal substances of deterioration based on intercomparison of laser Raman spectra of deteriorated products.”(J Wood Sci 52、140-146、2006)、“Volatile organic compounds from wood and their influences on museum artifact materials. I. Differences in wood species and analyses of causal substances of deterioration.”(J Wood Sci 51、363-369、2005)、「ベイスギ(Thuja plicata)を内装材に用いた収蔵庫の空気環境とその揮発成分の文化財材質への影響—鉄の腐食の場合—」(文化財保存修復学会誌46、58-65、2002)などがある。



井上 洋一 (いのうえ よういち)

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館事業部事業企画課長

1985年國學院大學大学院文学研究科日本史(考古学)専攻博士課程後期単位取得、85年東京国立博物館学芸部考古課先史室研究員として任官。その後、主任研究員、先史室長、展示調整室長、企画展示室長、教育普及課長を経て、2007年より現職。日本学術会議連携会員、日本考古学会幹事。

専門は考古学、特に日本の青銅器文化。現在は青銅器の生産と流通の問題に興味をもつ。

著書に「銅鐸」(『考古資料大観』第6巻、小学館、2003)、「東京国立博物館所蔵弥生時代青銅器の鉛同位対比」(『MUSEUM』No.577、東京国立博物館、2002)、「銅鐸研究における多角的視点とその成果」(『銅鐸から描く弥生時代』学生社、2002)、「弥生文化研究の足跡—型式学と編年論を中心として—」(『考古学雑誌』第82巻2号、日本考古学会、1996)、「銅鐸起源論と小銅鐸」(『東京国立博物館紀要』第28号、pp.3-95、東京国立博物館、1993)

村上 隆 (むらかみ りゅう)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所上席研究員

1978年京都大学工学部卒業、80年同大学院工学研究科修士課程修了、85年東京芸術大学大学院美術研究科修士課程修了、88年同博士課程修了。日本学術振興会特別研究員、奈良国立文化財研究所入所を経て、現在にいたる。学術博士。文化財保存修復学会運営委員、日本文化財科学会評議員。石見銀山資料館名誉館長。

専門は歴史材料科学、材料技術史。金工を中心に材料科学の手法を用いて材料と製作技法の歴史的変遷を追求。また、文化財の環境や防災にも関心を寄せる。

著書に、『金・銀・銅の日本史』(岩波新書、2007)、『金工技術(日本の美術443)』(至文堂、2003)、『色彩から歴史を読む』(共編、ダイヤモンド社、1999)、『文化財は守れるのか』(文化財保存修復学会編、1999)、『博物館の環境管理』(共訳、雄山閣、1988)、『Japanese Traditional Alloys』(Butterworth、1993)、『文化財不可視情報の可視化—見えないものを見る視座—』(クバプロ)、など。

石崎 武志 (いしざき たけし)

独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所保存修復科学センター長

1977年北海道大学理学部地球物理学専攻卒業、79年同大学理学研究科地球物理学専攻修士課程卒業、86年同大学より理学博士の学位を取得。東京文化財研究所保存科学部長を経て、2007年より現職。東京芸術大学大学院美術研究科文化財保存学専攻保存環境学教授(併任)、文化財保存修復学会運営委員、国宝高松塚古墳壁画恒久保存対策検討会委員。

専門は地盤工学、保存科学。現在は、石造文化財の劣化と保存対策に関して興味をもつ。

著書に「タイの歴史的レンガ建造物の保存に関する研究」(土と基礎vol.53、No.3、2005)がある。

松田 泰典 (まつだ やすのり)

東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター長・教授

1979年東京農工大学農学部卒業、81年東京藝術大学大学院美術研究科修士課程(保存科学)修了。株式会社ミキモト(真珠研究所)を経て、93年東北芸術工科大学助教授、99年教授、2001年より現職。財団法人山形県埋蔵文化財センター理事、北海道・東北保存科学研究会代表、文化財保存修復学会運営委員、日本文化財科学会幹事。専門は文化財保存科学、地域文化遺産保護学、現在は東北地方の文化遺産の保護を中心に活動している。

02年マテリアルライフ学会総説賞受賞。

著書に“Scientific Study on the Sacred Lion Mask Used in the Traditional Festival To Make its Replica as a Substitute for Perpetual Succession of the Regional Culture in Japan”, 3rd Scientific Research on the Sculptural Arts of Asia, Proceedings of the 3rd Forbes Symposium at the Freer Gallery of Art (2007)、『文化財科学の事典』(朝倉書店、2003)、『文化財のための保存科学入門』(角川書店、2002)ほか。

西浦 忠輝 (にしうら ただてる)

国立館大学イラク古代文化研究所教授、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所名誉研究員

1970年東京農工大学卒業。75年東京文化財研究所入所。修復技術部主任研究官、アジア文化財保存研究室長、国際文化財保存修復協力室長、国際文化財保存修復協力センター長代理、保存科学部長などを経て、2004年より現職。

専門は保存科学。現在は屋外文化財の環境、劣化と保存修復対策の調査研究を行い、多くの国際プロジェクトに参画。ICOMOS(国際記念物遺跡保存会議)石造物国際専門委員。日本イコモス国内委員会理事、文化財保存修復学会運営委員、特定非営利活動法人文化財保存支援機構副理事長。

著書に、『美術工芸品の保存と保管』(共著、フジテクノシステム、1994)、『文化遺産の保存と環境』(共著、朝倉書店、1995)、『アジア・知の再発見—文化財の保存修復と国際協力—』(共著、クバプロ、1997)、『おもしろアジア考古学』(共著、連合出版、1997)、『世界の文化遺産を護る』(共著、クバプロ、2001)、『文化財の保存と修復』(共著、クバプロ、1999~2004)など。ほか文化財保存修復に関する論文多数。

文化財保存修復学会の沿革

文化財保存修復学会(旧・古文化財科学研究会)の活動は、昭和8年に滝精一博士の提唱によって発足した「古美術保存協議会」に始まります。戦後にいたって、「古文化財之科学」(柴田雄次編集)を創刊し、昭和50年には会の名称を「古文化財科学研究会」と改め、文化財に関する幅広い研究活動を続けてきました。しかも近年、文化財の科学的研究が盛んになるにしたがい、この分野における草分けともいべき本会に課せられた責任は、ますます重みを加えつつあります。そうした要求に対応するため、本会は平成7年に「文化財保存修復学会」として新たなスタートを切りました。

本会の特長として、物理、化学、生物など自然科学諸分野の専門研究者はもちろん、考古学・建築史学・美術史学など人文科学部門の研究者、文化財保存関係機関の専門家・技術者・博物館や美術館の学芸員、その他文化財の科学的研究に関心をもつ多くの分野の方に参加いただいています。

(「入会のしおり」より)

◆文化財保存修復学会の連絡先

〒154-8533 東京都世田谷区太子堂1-7
昭和女子大学 光葉博物館内
Tel: 03-5432-0620 Fax: 03-5432-0622
E-mail: jsccp@sepia.ocn.ne.jp
URL: <http://www.soc.nii.ac.jp/jsccp/>

文化財保存修復学会公開シンポジウム実行委員会

委員長 ●三輪 嘉六
副委員長 ●西浦 忠輝
委員 ●井上 洋一 神庭 信幸 坂田 雅之
松田 泰典 村上 隆 村田 忠繁
補佐委員 ●宇田川 滋正

文化財の保存と修復シリーズ刊行のお知らせ

文化財の保存と修復⑨ 東北の文化財

文化財保存修復学会編/B5変形判/116頁
ISBN 978-4-87805-086-2 C1070/定価: 本体価格1,400円+税
平成19年6月8日第1版発行

※本書は平成18年11月に開催されたシンポジウム「文化財の保存と修復—東北の文化財」の講演収録集です。

基調講演 東北の歴史と文化財

東北芸術工科大学 入間田 宣夫

平泉の歴史と文化 平泉の文化を世界遺産に

前・東北歴史博物館館長 工藤 雅樹

新たな保存と活用をめざして 史跡多賀城跡の保存と整備

多賀城跡調査研究指導委員 進藤 秋輝

文化財保存の継承の継続・新しい方法の模索

東北の文化財をまもる!

東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター 手代木 美穂

環境にやさしい保存材料と技術

特別史跡大湯環状列石(ストーンサークル)の保存

国立館大学 沢田 正昭

2003年宮城県北部連続地震後の活動

地震で被災した歴史資料を保全する

東北大学東北アジア研究センター 平川 新

北の縄文世界 特別史跡三内丸山遺跡とその保存・活用

青森県教育庁 岡田 康博

パネルディスカッション

<問い合わせ先>

(株)クバプロ内「文化財の保存と修復Ⅱ」事務局

〒102-0072 東京都千代田区飯田橋3-11-15 UEDAビル6F

E-mail: bunkazai@kuba.jp URL: <http://www.kuba.co.jp/>

TEL 03-3238-1689 FAX 03-3238-1837